

多峯主山登山を通して学んだこと

『11月にもご一緒した学生さんですよ？』

そのひとことにおろおろして固まっていた私の緊張が一瞬にして溶けた。集合場所の池袋南口でまだゼミ仲間も来ていなく、心細くて、勇気を出して会員の方に話しかけようか迷っていたときに、ふと、隣にいた方が微笑んで話しかけてきてくれた。落ち着きのない私に気づいたのだろうか、覚えててくれていたという安心感となぜだかなつかしい場所に帰ってきたような感覚がした。向かいでAさんがこちらをみてぺこりとおじぎをしてくれた。“ここにも、私の居場所があるんだ”と人を受け入れてくれるあたたかさを感じた。それだけでも、本当このゼミに入ってよかったなと思った。

今日登る山は多峰主山、飯能市にある標高271メートルと比較的低く、ハイキングとして有名なコースであった。飯能市から住宅街を抜けてすぐ山道に入り1時間足らずで山頂に着いた。お年寄りからカップル、親子連れともすれ違い、そのたびあいさつをするのが、とても心地よかった。都会で他人とすれ違うとき、特に朝の駅の殺伐とした空気とはまったく違い、穏やかでやわらかい空気がそこにあった。ここにも、相手を仲間として受け入れるあたたかさを感じた。自然がそうさせてくれるのであろうか。やはり、人間と自然は切り離せないのだろう。

前回、11月の鐘ヶ岳でもサポートした視覚障害のあるHさんのお手伝いを今回もさせていただいた。Hさんは登山のベテランで、雰囲気のある方でそして 트렌ディードラマの主演のような聞いていてうっとりする声の持ち主であった。『そんな気を使わなくていいわよ』と言って下さったのは笑顔の素敵なHさんの奥さんであった。奥さんの笑顔のかわいさはぴったりの言葉が見つからないほど人の心を優しくさせる印象的な笑顔だった。夫のHさんのサポート私たち学生に任せて、後ろからずっと見ていて下さった奥さん。きっと奥さんのこの笑顔の裏にはたくさんの困難を乗り越えてきた過去があるのだろうと感じた。視覚障害を持ったHさん自身ももちろん私には想像もつかないほど大変である。しかし、障害を持つ人の周りの人も、同じ位苦労を重ねているだろう。ここに来るまで、至るまでどのようなことがあったのだろう。伝わらないもどかしさや、社会への不満、支えて生きていくことの難しさ、きっとたくさんの衝突があっただろう。私の想像力と知識ではまだまだ足りない。が、それを二人で切り抜けてきたからこそ、奥さんの人をひきつける笑顔も、Hさんの安心を人に与える声も、存在するのだろうと感じた。自分に置き換えてみた。もし、自分の夫が視覚障害であったら、家から出したくない、できれば安全な家にいてほしい、ましてや危険な登山なんて何があるかわからない、といって相手の意見も聞かず夫の自由を奪い、夫婦で閉じこもってしまうかもしれない。Hさん夫妻をみて、お互いの長い年月をかけて作り上げた強い絆と経験、障害を乗り越えた、もしくは障害あってこそその深い夫婦愛を強く感じた。登山を始めたころには暑くて上着を脱ぐほどだったが、下山するころにはすっかり、気温も下がり、日中にかいた汗がひんやりとして寒く、まだ

冬まっさい中であることを思い出させた。前に行くHさん夫妻が手を取り合っている姿は、私の心を優しくさせた。いろいろな愛の形がある。愛するということはそれだけですばらしい。愛とは決して一方的ではない。因果応報、ソウル名と、先生の授業で習った言葉が浮かんだ。ここで出会ったすべての人々との出会いがかけがえのない縁であり、大切にしたい。きっと、私はまた春にAさんにメールをするだろう。人々と、自然から元気をもらうために。そんなことを帰りの電車で揺られながら私は考えていた。